歌集

萬軍

齋藤茂吉

歌集

萬軍

齋藤茂吉

目次

日負ふ御軍（五首）……一八
乾坤（五首）……一七
覺悟（五首）……一五
開戰（十首）……一四
轟沈（五首）……一二
絶待（五首）……一〇
新年光（五首）……八
戰勝新年（五首）……七

二軍神勅祭（五首）……二〇
大詔奉戴日（六首）……二一
香港陥落（八首）……二三
建国祭（五首）……二五
シンガポール陥落（五首）……二七
昭南島（四首）……二八
萬歳（五首）……三〇
陸軍記念日（五首）……三一
讃九軍神（四首）……三三
奉祝天長節（五首）……三四
海軍記念日（五首）……三五

軍神につづけ（五首）……三七
新年頌歌（五首）……三八
撃ちてしやまむ（五首）……四〇
戰記（五首）……四一
大東亞の黎明（五首）……四三
あゝ山本元帥（五首）……四四
學徒出陣（五首）……四六
大東亞會議（五首）……四七
歳旦頌（五首）……四九
言盟（五首）……五〇
さびし（五首）……五二

決戰（五首）……五三
戰運（五首）……五五
神軍（五首）……五六
新春（十首）……五八
特別攻撃隊（五首）……六一
決戰（五首）……六二
後記……六五

歌集　萬軍（ばんぐん）

日負ふ御軍

天皇のいましますに「無禮なるぞ」われよ
りいづる言ひとつのみ

つらぬぎて徹らむとするいきほひに碧眼奴國
の悔をゆるさず

うたがはぬひとつだましひに對ひ來む何もの
かあらば常にまたむぞ

ひむがしの亞細亞わたらふちよろづのすめら
御軍は日頁ふみ軍そ
臣の道はひたぶるにして直淨しかゆきかくゆ
き豈うたがはめ

乾坤

あめと地といのちのまにま獻げまつらむ心き
はめし朝あけわたる

さだまれるひとつだましひ乾坤に大きなるか
なや朗らかなるかなや

せまり來るものにただちに相對ふ心きはまり
て安く眠らふ

たわやめのたぎつ涙の清けれどあかき光に人
に知らゆな

よしゑやし一人なりとも生ける甲斐ありて退
轉の悔をゆるさず

覺悟

きはまれる覺悟となりて一億の心かたみに寄
らむとぞする

ひるむもの畏るるものなくなりてかたみの
心うたがはなくに

ためらはぬ救身捨命のかなしきをさながらに
して神受くらむか

おほうみの直中にある皇國の艦こそぞれす
めら御艦は

海神の護りたまへるわが海に何のくなたぶれ
障らむとする

開戰

昭和十六年十二月八日

たたかひは始まりたりといふこゑを聞けばす
なはち勝のとどろき

たぎりたる炎をつつみ堪へしのびこらへ忍び
しこの國民ぞ

やみがたくたちあがりたる戰を利己妄慢の國
國よ見よ

何なれや心おごれる老大の耄碌國を擊ちてし
やまむ

いかり浪あらぶる如く火のたまのやぶるる如
く戰ひすすむ

おのづから立ちのぼりたる新しき歴史建立の
さきがけの火よ

あな清け胸のそこひにわたかまる滓を焼きつ
くす火焔のぼれり

戰はたちまちにして乾坤をゆるがすときに勝
どきのこゑ

「大東亜戰爭」といふ日本語のひびき大きな
るこの語感聽け

大きなる時に會ひつつはふりくる勇みの涙の
ごひにのごふ

轟沈

クアンタン沖に神集ふまたたくまわが空軍は
とどろきわたる
罪ふかくおどおどとして北上せる敵戰鬪艦は
たちまち空し

天地創造の元始以來のうつくしさ神と共なる
この攻撃は
敵の艦ほふりつくせば畏きやわが天皇は嘉み
したまへり
高ひかる大詔勅かしこみて全けさ力ささげた
るのみ

絶待

絶待に勇猛捨身の攻撃を感謝するときに吾は
ひれ伏す

大きみの統べたまふ陸軍海軍を無畏の軍とひ
たぶるおもふ

あまがける龍のいきほひそなはりてわが空軍
は出動したり

レパルスは瞬目のまに沈みゆきプリンスオブ
ウエルスは左傾しつつ少し逃ぐ

訓練といふ話は抑遠に遐ぎぬべし徹頭徹尾捨
身ならずや

新年光　昭和十七年

あらたしき年の光を浴びつつぞ勇みいさまむ
おほ寶われ

なにものか畏れむといふかたはらに轟轟とし
て器械の音す

ひたぶるの心ひそめてしづかなる勤めの業に
飽くこともなし

忍辱の多力なること少年のときに吾知りてい
まぞ念はむ

ひとすぢに獻げむとするおこなひは時を超え
つつ神ながらなる

戰勝新年

大きなるこの新年のあさあけに心きはめむた
めらふなけめ

勝ちきほふあらたしき代のときのまも皇御民
はおほろかにせじ

神日本磐余彦すめらみことの古へゆ「戰勝ち
ておごることなき」

さやけくもひむがし亜細亜の曙はのぼるくれ
なゐを陣頭にせり

かぎりなく流らふるかなやまなかひに第二創
造のあめつち來る

二軍神勅祭

ひたぶるに大皇軍をまもります伊波比主のか
み武甕槌のかみ

天の鳥船の神をしたがひ忽ちにいたりましけ
る武甕づちのかみ

天てらす大御神の詔りたまふ言よしと十拳の
つるぎ拔きにけるかも

大軍みちびきたまふニばしらいくさのかみに
御言寄さすはや

勝軍つらぬきとほす大神とあなあらけし加
護あらせたまふ

大詔奉戴日

かしこみて勇みたちける十二月八日の朝を永と
久にさだめつ

もろもろは聲をかぎりにをたけびし十二月八
日を常にこそおもへ

をやみなき勝の軍にくに民はいかなる言をも
ちて言はむか

いかならむ勝にありとゐなまぬるき心おごり
を戒めあひつ

このときにあたりて荘厳なるものを見よマレ
エをくだるわが大縱陣

さいはひのいかなる吾が生のかぎりこの勝軍
たたへてやまじ

香港陥落

あつち
天地も溶けむとそする攻撃に悪業の英領香港
くだる

香港の彼の美麗なる一島も百年の罪もちてお
ちいる

ヴィクトリアピークの敵陣にひるがへる日の
まるの旗とどろく勝どき

香港は陥落したり香港の陥落したることをお
もはむ

聖戰のそのはじめよりあくどくもあくどき妨
礙したるところぞ

重慶の女性の輩にいたるまで洒唖洒唖として
此處に飛びにき

罪ふかき阿片戰よりこの方のことを思へば電
往のごとし

百年の威勢をここにとどめたる香港陥ちて時
はあらたし

建國祭

おほやまと國を肇めしいきほひはけふの現実
に弱あらたなり

肇國のひかりを放つ日にあたりわが皇軍は勝
ちに勝ち勝つ

赤道をすでに越えたる萬軍のいさみ勇むはい
かにか讃へむ

建國のけふの佳き日に天皇にささげまつらむ
大き勝闘

とめどなき吾等の感謝をうけたまへ威のみ
いくさきほふ皇軍

シンガポール陥落

正しきは永遠にして勝ちさぶとシンガポール
は今ぞおちいる

罪悪のほろびむとする轟音にシンガポール陥
つシンガポール陥つ

八百よろづ千よろづ神も一ごゑにあげたまは
むぞ大き勝鬨

新しきひむがし亜細亜さだまりてシンガポー
ルの陥入る聞こゆ

勝どきのこゑ〻そあがれ印度國印度の洋のう
ちふるふまで

昭南島

國うみの聖く永久なる徴もて「昭南島」のあ
さらけき名よ

淨く明き大き亜細亜のさだまりに今こそは生
れめすめら新島

あめつちに充ち足らはさむあらたしき皇土の
ひかり此處よはなたむ

おのづからもろもろの民の睦みあふ港は今ゆ
ひらけむとする

萬歳

シンガポール落ちて二日を過ぎし日のけふ萬
軍のことをおもへる

ひとときにこみあげてくる感動は独居のわれ
の眼に涙たまる

二重橋まへにいたれる数萬の臣民のごとくこ
こに立ち居り

学校より歸りて居りしわが娘と正午勝鬨に和
しをはりけり

ごみごみとしたる部屋よりいそぎくだり來て
萬歳のこゑをあげたり

陸軍記念日

おほきみの大御軍をいはふ日は春の光のわた
らふときぞ

かしこくも三つの軍を統べたまふ大御こころ
は神にいませり

いきほひの限なく伸ぶる皇軍の象徴として今
日をさだめき

奉天のきびしき勝は今日の日の先駆をなしし
ことな忘れそ

とりわきて今日をおもへば皇軍に無盡無量の
感謝ささぐる

讃九軍神

いかづちと海にとどろき果したるますら御魂
を今かむかへむ

春の日は照りこそわたれ九たりとむらふ今日
をとはに悲しく

ささげたる命ここのつ國をおほふ永久の光と
今かかがやく

かなしみの楽にたぐひて空ひびく銃うつときに
よみがへり來よ

奉祝天長節

たたかひといへども心たひらけくして天長節
にあひたてまつる

さやけくも大御軍のすすむときすめらみこと
の生れましの日よ

わが大君うまれたまひし天足らすかがやきの
日に勝のいや幸

天がした共に榮えむくにぐにの民等こぞれる
ことほぎのこゑ

あまつ日は瑞葉青葉に照りはえて今日のひと
日を顯はしにけり

海軍記念日

かがやける今日の一日を忘れじと國民こぞる
今日の一日を

大君の海の御軍のいきほひの世界おほはむ時
ぞ來むかふ

大平洋上印度洋上に機動して神力のぶる海の
皇軍

山川に青葉かぜ吹き大洋に海のいくさの旗ひ
るがへる

日本海海戰の日をことほぎて珊瑚海上の勝を
たたふる

軍神につづけ

戰ひて必ず勝たむさだまりを吾等は継ぎて進
みに進む

このひとりこの時のまのおごそかさすめら御
軍はいまぞたたかふ

あめつちにただひとつなる大き勝つらぬかむ
とするやまとだましひ

富みほこる敵にむかへるたましひを神のみま
へに申したてまつる

大きなる敵こそよけれ勝さびにこのたたかひ
を賢かむとす

新年須歌 昭和十八年

とよあしはら瑞穂のくにの初春のあまつ光は
勝を徴さむ

おごりたるかの敵國をきためむとまたたく間
もこころ忘れず

大きなる時にあたりて生けるわれ力きはめむ
とす一日たりとも

あめ地にめぐりわたりて完けかる勝の體制に
吾もひとり居り

さいはひを言擧げむとす大きなるこの新年に
逢ひらく吾は

撃ちてしやまむ

この心死すとも止まじえみし等をつひの極み
に撃ちてし止まむ
敵せむるひむがし亜細亜の眞力あらはさむ時
いたりたらずや

心おごりてせまる老大の敵國の極まらむまで
撃ちにし撃たむ
肇國しらす天皇のみ言はや「撃ちてしやまむ」
のこのみ言はや
はつ國のそのいにしへゆ雄たけびてすめらみ
ことも進みたまひき

戰　記

ガダルカナル密林こえしたたかひを聽きつつ
心こらへにこらふ

はるかなる南の島にたたかへば木の葉草の根
くひつつぞねる

ことわりをすでに絶えしとおもへども吾の涙
のおちざらめやも

あかつきに上陸したる一部隊ルンガ河西方に
その忠に果つ

「決戰の連続」といふ表現が心をうちて聞こ
えて來る

大東亜の黎明

たたかひはたけなはにしてはやはやもひむが
しアジアの大きあけぼの
けがれたる夷ほろぼさむきはみまで神ながら
いざ戰はないざ

大きくも成り成る時ときほひたつこのよろこ
びに涙しながる

たたかひの炎とどろきのなかにして見えそむ
る亜細亜のあかときの空

「決戰の連続」といふ表現が識闘のうちにつ
ねに燃えたつ

あゝ山本元帥

なげかむに言も絶えつつ天地も極まらむとぞ
かなしみわたる

もののふは和に死なじとさやけくも天のみな
かにかくりたまひぬ

かぎりなき勲功まちし國民は今のうつつを泣
くに堪へめや

たたかひの常とこそいへますらをはひたぶる
にしも直道なるはや

大きなるこのかなしみに天地も昏まむとして
堪へがてなくに

学徒出陣

青年のひとつごころは今なれや学問の道はた
たかひのみち

門をいでて戰はむとするときしもあれ一とき
のまもたゆみゆるさず

つねの日に養ひたりしたましひを明かにせむ
時ぞ來にける

全けきをささげまつらむ時は好し時至れりと
学徒大進軍

覚悟より覚悟に入りし極まりは精なる軍とこ
ぞりけるかも

大東亜會議

大亜細亜全けからむとつどひたる國家代表の
壯觀そこれ

かぎりなく澄みわたりたる高天を飛び來まし
たる五つ國びと

共榮圏一つきほひにきほはむと元首指導者あ
まかけり來つ

新しき獨立國の勢ひをけふの一日に目のあた
りにす

たたかひのさ中にありてかくのごと睦ぶここ
ろの豊に厚らに

歳旦頌

昭和十九年

たたかひはたけなはにして勝鬨のひびきのな
かに新年きたる

御いくさの勝のわたつみ一夜あけ大きあまつ
日豊さかのぼる

たたかひの力みなぎりさくなだり日の本つ國
年明けにけり

すめろぎの大御いくさの神ぢからいよよ清か
に祝ぎたてまつる

過ぎゆかむいなづまなせる時さへや戰ふ力こ
もりこもれり

言盟

あらたしき年のはじめの言盟つよくさやけく
徹りゆけこそ

適齢が十九歳よりと定まりて勇みたつ子等の
その額みよ

マーシャルは如何にかあらむマーシャルをお
もへば心たぎちてやまず

前線にある神兵が空あふぎさびしさ一語を言
ふとこそ聞け

刻々に展開せられむとする動運をわれこそは
知らめそのせまれるを

きびし

むらぎもの心さだまればあな清け乱れむとお
もふものならなくに

大君のいましますみやこの空まもる空の神兵みち
足らひたり

爆弾のたばしる中も神守こころに持ちてさや
ぐことなし

いくばくの敵機おそひて來るとも撃ちてきた
めむ無畏をたまへり

このみ空犯さむとして來るもの來らばきたれ
撃ちてしやまむ

決戦

まさしくも時ぞ來むかふこの敵を空の直路に
邀ふる時ぞ

ひたぶるに驕り驕りて寄するものきため果せ
とふ時のめぐりぞ

にくにくし敵のいくさのせまれるを眠れるひ
まも思ひやまめや

大かぜの吹くおとのするたまゆらも島の皇軍
たたかふらむか

大き勝きはまらむとして天地のひびきわたら
ふ時は近けむ

戰運

やみがたき怒りの炎たばしれるこの戰運を祝
がざらめやも

にくにくし敵にむかひて甚猛の能動戰の時は
いたれる

たまきはるけふの生のくれなゐの血しほのたぎり空しくし焉な

さにづらふ毋の頬にて甚猛の攻撃を完けくしたりこの勝や嗚呼

この勝をまのあたりにし國民の心ゆるびは許さるべしや

神軍

必殺のいきほひとして薄りたる敵撃てる空の神軍あゝ

大きなるかなやこの勲にたぐふべき勲つぎてわれは待たむぞ

あはれあはれ時もおかざる純忠のこの能動はいづこより來る

敵うちてより歸らざる三百機忠のきはみの永久のしづまり

たはやすく言ふことなかれ神國のやまとだま
しひは斯くのごときのみ

新春　昭和二十年

天皇の尊影けふの新聞に載りたまひたりあな
かたじけな

ぞくぞくと続きてやまぬ決死隊神代ながらの
血潮をもてり

しばらくは赤土の香のしてゐたる壕の中にて
ものおもひなし

大君のしきます國の澄みに澄む忠のこころを
永久に人見よ

乏しきにこらへてこらへて戦の力をのべむ國民
いまは

盡忠のやまとだましひたばしりて相つぐ海陸
特別攻撃隊

かぎりなき忠の心のあらはるるたたかひの世
にわれもみ民ぞ

あらたしき年のはじめの祝言ぞ「いのち死し
ても勝たざらめやも」

せまりたるこの決戰の様相に一億のみ民直に
いむかふ

神ながらやまとだましひの攻撃や神風隊をさ
きがけとせる

特別攻撃隊

大元帥統べたまふ軍のいきほひの最中かがや
くこのいつくしさ

きはまれる大き行爲を端的の捨命のごとくわ
れもおもはむ

あめつちに至りわたれるたましひをわが戰に
まのあたりにす

微塵なすかろき命といふ比喩もはや空々しこ
のたたかひに

大君は神にいませばうつくしくささぐる命よ
みしたまへり

決戦

決戦の時いたれりとこそりたる國民戰闘隊國
民義勇隊

皇軍のおのもおのもは時しもあれたぎつ火玉
とならむとすらむ

高山の聳ゆるさはみ大河の流るるきはみ戰は
ないざ

沖縄の戰後に於けるわが覚悟、以て撃つべき
生き長ふ

薄るものむかへむとするいきほひは大土のご
ゝ時にしづけし

後記

この戦歌集に私も参加することになりまして、二百二十首餘りを選んで見ました。

大東亜戦争勃発以來、私も隨分渾山の歌を作りましたが、そのうちから抜きまして、大體かういふ傾向のものとなりました。即ち、各地各地の戦闘の歌といふよりは、大東亜戦争を概觀した歌、その感動の歌といふやうになつたわけであります。

集を命名して「萬軍（ばんぐん）」といたしましたのは、

私の作つた歌の中にこの語が入つて居るから
であります。

昭和二十年夏

齊藤茂吉